

八二 堂形、新堂形、御算用 場消防人夫之事

御城下火事之節、堂形・新堂形に百姓三拾人充、御算用場に百五拾人相詰候。十村之手合分、御算用場に張紙有之。

八三 浦方の寄鯨有之節割符御定

鯨寄候居村に、十歩之圖りを以五歩可被下、右居村濱ならび兩脇三ヶ村宛六ヶ村に貳歩宛。但、貳ヶ村有之候而も同事。右居村近所里方三ヶ村に壹歩可被下。尤寄鯨之儀早速可及注進旨、承應二年被仰出。

八四 牢 賄 之事

一日分 男七合五勺、女六合五勺、二三歳之子三合
右塩・味噌・薪代共如斯也。

八五 鳥追赦免及び停止之事

一、新川郡雪之内雉子追之儀御赦免。

一、氷見庄之内守山より石動之方續、鳥追之儀御停止也。朱書。是は定て以前石動山と此事に付詮議ある故なるべし。

八六 改作御法申渡之事

覺

一、當年早速爲致歛初、耕作油斷仕間敷事。
一、村々百姓中應持高人馬所持仕、當年作之用意手間有之間敷候。例年之通、其組廻り候御扶持人申談、可令吟味事。
一、改作方稼致龜抹、申立茂無之、作用意手づかへ候者有之候はゞ、急度可被仰付候條可申聞事。
一、常々致村廻、御法度之條々申聞、改作稼等油斷不仕様に申付、組下成立之様可仕事。
一、物每名代まかせにいたし、自然不儀有之候はゞ、主人可爲越度事。
一、一季居之奉公人、又は町方・宿方に有之高不持もの、親類等にたより無故引込、百姓之勝手を費不申様に可申付候。應持高里子不足、改作手間引込申者は、十村并御扶持

人聞届可申聞候。每春申渡候得共、組により斷も無之引込申由に候條、其儀協より相聞候はゞ、其組之十村可爲不念事。

一、不應百姓買物仕、ゑやうの同名つきあひ仕、耕作を無沙汰にいたし、手前衰申者有之候はゞ、可爲曲事。

一、最前頭書に而申渡通、村肝煎・小百姓算用之儀は年功に爲致、濟證文十村方取置、以後出入無之様に可仕事。

右之通組下爲申聞、令吟味、當作縮書付二月廿日以前組切に可出之者也。

年號正月十七日

八七 享保六年諸郡に申渡之事

覺

一、諸郡百姓之内、改作不情もの有之、收納米不足仕候はゞ、其村々肝煎・組合頭并村中之者打寄遂會議、早速十村に申斷受指圖、收納米致不足候百姓之家財は不及申、牛馬并に垣根之竹木賣拂代、且又家内之男女奉公に出し、其給米等を以收納皆濟爲仕可申候。持高之分は一作下しに仕

置、作徳米を取、奉公茂難成老人・幼少者をやしなひ置、奉公に罷出候者數年相立力付候刻、爲引込爲致手作可申候。如斯に而も未不足米有之、可仕方便無之候はゞ、組合之村々に茂申談、其段十村に相達、指圖次第其年之不足米に應じ切出し高仕、永代相渡之旨證文相極可申候。十村委細吟味仕、品々帳に其段相記、印を請可申候。尤、殘高は前段之通可仕候。但切出高望人無之候はゞ、十村見計、勝手宜者に申渡爲請取可申候。違背に及候はゞ可申斷候。急度可申付事。

一、切出高取候者、其村に爲引越、百姓棟を相立可申候。然共其村爲引越子供も無之時分、其領十村に申斷、如先例懸作持可仕事。

一、大高を持來候百姓、若收納米不足仕候節も、先切出高不仕、前ヶ條に有之通夫々賣拂、家内之者爲致奉公、力付次第爲引込可申候。乍然他村に懸作高を持候はゞ、其段十村に可申斷、吟味之上品により懸作高之分は切出高爲仕可申候。去共無據居在所に持來候高之内切出高仕儀に候はゞ、可爲前段之通事。